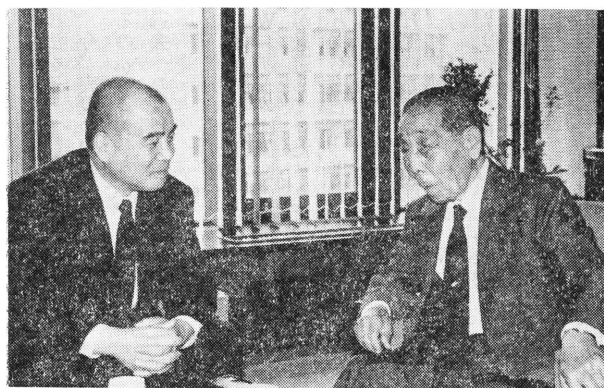


仏教伝道協会発願者

## 沼田恵範氏に聞く

— 仏教伝道にいのちを捧げて —



聞き手

本学学長

水谷 幸 正

水谷 先生のご尊名はかねてから伺っておりましたが、なかなかお目にかかることができませんで……。こうして直接お話を聞かせただけの機会を得ましたことは、本当にありがたいことだと思っております。

沼田 いえいえ、こちらこそご無理をお願いしております……。わざわざ遠方をお越しただいて恐縮でございます。

水谷 早速ですが。先生は、仏教伝道協会の活動を通して、世界的な規模で仏教の伝道に献身的な努力をなさっているわけですが、その献身ぶりは、まさに現代の菩薩だと言っていると思っております。「仏教伝道文化賞」も今や権威ある賞として定着しておりますし、世界各国語に翻訳した『仏教聖典』を世界中のホテルなどに配布されている。さらに、アメリカで『大藏経』の英訳に着手しておられる。その他にもいろいろな面で仏教伝道のためにお力添えをいただいているわけで、これは大変なことだと、手を合わして拝みたいほど感謝しているというのが、私の偽らざる気持ちでございます。

沼田 いやいや、そんなに仰っていただくと恐縮してしまいますが……。

水谷 こういう立派な事業を推進なさって

いるのも、先生の並々ならぬ信仰心に根ざしていることをごさいます。今日、この『佛教大学學報』の読者のために、先生のこれまで歩んでこられた歴史と申しますか、人生と申しますか、そういうことをぜひともお伺いしたいと思っています。わけでございます。

沼田 私はこういう生活をしておりますので、勉強したり本を読んだりする時間もございませんが、自分自身がやってきたことは自分が一番よくわかっておりますので、それがいいか悪いかは別にして、何かご参考になればという程度のことならお話しさせていただきます。

#### 開教使補の資格でハワイへ

水谷 ありがとうございます。先生のご生家はお寺さんだそうですね。

沼田 そうです。私の家は広島のアサキ門徒でございまして、ご存知のように浄土真宗が盛んなところで、その小さな貧乏寺の三男坊に生まれさせてもらいました。当然のことですが、おじいさんも、父も母も非常に熱心な浄土真宗の信者でありましたから、大きくなったらいとお坊さんになれよと、まだ小学校へも行かない時分からそう言われてお育て

をこうむったようなわけで、それは私にとって非常にありがたいご縁だったと思います。

水谷 そういうことですね。

沼田 村の小学校が四年制から六年制になったときでして、村には高等小学校もないし、もちろん中学校なんてなかった。高等小学校は隣の村にありまして、そこに一年通いました。いわば七年制ですね。それから中学ですけれども、寺の息子ですから、本願寺立の広島第四仏教中学へ入りました。

水谷 崇徳ですね。

沼田 そうです。現在の崇徳と同じところで。そこへ一年参りましたが、二年目のときに大谷光瑞猊下が六甲山に六甲中学をお建てになって、第四仏教中学もそこへ移ることになりまして、校長はじめ全生徒が六甲山へ引っ越したわけです。ところが、それも一年で解散しましたね。それで私は平安中学に移籍したわけです。ですから、卒業は平安なんです。そんなことから、やっと中学を出たというのが、私の日本での学歴なんです。

水谷 一年ごとに変わるというのも大変なことですね。

沼田 もともと、上の学校へ行きたいとは思っておりましたが、何しろ貧乏寺の三男坊

のことで、大学まではとても出してもられない。だから、中学を出たら書生でもして、自分で上へ進もうと思っておりますときに、本願寺から開教使補という資格をもらえば海外で勉強できるということを知りました。平安から私一人が選ばれたのですから、それでアメリカへ行くことになったわけです。行くといっても、旅費も滞在費も一銭だって出るわけじゃなくて、その資格がなければアメリカへ渡れなかったということです。もちろん開教使ではありません。そんな力は私にはございませんけれども、補として、卵として勉強してこいということでアメリカへ行かせてもらったということです。

水谷 なかなか勇気のいることですね。相当な覚悟をして……。

沼田 まあ、勉強したい一念でしょうね。最初はハワイへ渡りまして、ホノルルの本願寺で小僧をしながら英会話の基本を習いました。当時は本派本願寺の教会がひとつあっただけだと思いますが、かなり盛んでした。

#### アメリカ本土へ渡る

沼田 言葉にも慣れ、耳も慣れてきたところ、かねてから望んでいた勉強をしたたいと

いうことで、本願寺とも離れて、本当の独立歩でアメリカ本土へ渡りました。

水谷 大正のはじめ頃ですか。



沼田 大正六年か

七年だと思います。

その頃は、船で行くわけですが、海流の関係で北部のシアト

ルに着いて、それからサンフランシスコへ行くんです。私はさらに五百マイル南のロサンゼルスまで行きました。私が行った頃は、まだサンフランシスコが日系人の中心地で、ロサンゼルスの日系人は本当にごくわずかでして、お寺さんにしても何もなかったはずですよ。ただ、本願寺がやっと根拠を構えるというところで、きたないビルルの二階を借りていました。三階がバクチ場、一階が倉庫でしたからね。

そういう状況ですから、いきなり職があるわけじゃありません。そこで、いわゆるスクール・ボーイをやったわけです。映画の都としておなじみのハリウッドにあるハイスクールに入りまして、そして、一般的なサラリーマンの家庭でしたが、そこのお手伝いとして雇ってもらったんです。学校へ行く前に朝食

の支度をし、食事の後の片づけをして学校へ行く。帰ったら掃除、夕食の支度、後片づけ、それが終わったら自分の時間という生活でした。日曜も働いて一週二ドルくらいでしたか。それで学費から着るものに靴まで賄うんですから、これは随分つらい生活でした。

水谷 そうでしょうねえ。

沼田 まあ、重労働というか、休みのない生活で、精神的な苦勞も重なったのだらうと思います。でも体の調子がよくないというので診てもらったら、胸を悪くしてるんじゃないか、と言われましてね。人生九十年の中で、これくらい強い精神的ショックを受けたことはございません。まだ、二十一か二の時でしたか……。

水谷 結核ですか。

沼田 そうです。今でいえばガンだと言われたようなものです。一銭の金もないから帰ろうにも帰れない。もし死んだらその辺に捨てられてしまう。そんなことをいろいろと想像していましたね。私の人生において一番どん底だったでしょう。精神的に。

水谷 その時に親鸞聖人のお言葉が支えになったと伺っていますか。

沼田 家を出るときに、父から南無阿弥陀

仏のお名号、おじいさんからは経典、母からはお数珠なんかをもらっておりまして、悲しくなったときにはお名号を壁にかけて読経しました。そんなときにいつも思い出したのが、母から聞かされていた親鸞聖人の御教えでした。特に、「ひとり居て喜ばば二人と思え、ふたり居て喜ばば三人と思え、その一人こそ親鸞なれ」というお言葉。唯一の精神的なぐさめでございました。そうしているうちに、一年ほどで回復したんですね。医者も首をひねっていましたけど、喜んでくれました。今もその痕跡は残っているそうですが、私がそういう環境で育てをこうむっていなかったら、自暴自棄になるか、多少よくなっている、違った道に進んでいただろうと思います。

水谷 そのことだけではないでしょうが、それを一つの契機として、その後の活躍があることは確かなことですからね。その後、大学へ進まれるんですね。

#### 大学進学と仏教雑誌の出版

沼田 日本を出るときに、十年はかかるだろうけれども何とか大学へ進みたいと思っておりまして。十年計画ですね。大学をどこに

するからです、東部にはハーバードもあるし、同じカリフォルニアにはスタンフォード大学もある。ところが、どちらも私立で月謝が高いわけです。貧乏人の私にはとても無理だから、州立で月謝の安いカリフォルニア大学のバークレーのキャンパスを選びました。

競争も相当あったようですけれども、何とか入れたわけです。大学は、そんなにゆっくりにしているわけにはいきませんから、夏休みも大学へ行ってどんどん単位をとりまして、四年の課程を三年で修了しました。マスターの方は後ですが。

水谷 その頃に仏教の啓蒙雑誌を出版なさるんですね。

沼田 本当に不思議なご縁でただ一人でアメリカへ渡ってきて、病気などで大きな苦しみも味わいましたけれども、命を永らえさせていただし、大学へ進みたいという希望もかなえさせていただいた。それに対して、何とか感謝の気持ちを表すことを一つとしておきたいと思ひまして、アメリカ人に仏教を伝える仕事をはじめたわけです。しかし、働きながら学校へ行っている身ですから、当然お金はございません。そこで、一つの学生運動としてこれを進めていこうと考えたわけ

です。当時は、日本人はジャップといっていじめられていましたし、仏教徒だということになりますと、職なんかくれなかったんですから。

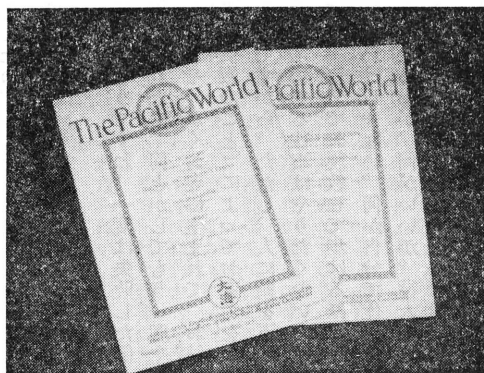
水谷 ジャップが下に見られたのはわかりますけど、仏教もいけなかったんですか。

沼田 邪教です。日本人学生でも、わざわざキリスト教の教会へ行ってクリスチャンになっちゃうんです。いいアルバイトを見つけないからです。

水谷 現在はそんなことないでしょう。

沼田 もちろん、現在は状況が全然違います。とにかく当時は、日本人は最下等のランクに入れられていました。もともと、ニューヨークなどでは多少は紳士扱いされたようですけど、太平洋岸はひどいものでした。仏教なんて正面に出したら、それこそ相手にしてくれない。まあ、その中で仏教を伝えようというわけです。母校のカリフォルニア大学、お隣のスタンフォード大学、それから南カリフォルニア大学などで、日系人と仏教に理解のある学生を集めまして、学生運動として『ザ・パシフィック・ワールド』という雑誌を出した。表面的には東洋の文化を伝えるというところで、二か月に一回の発行ですが、金

があるわけじゃありませんから、商社の広告だとか、理解ある人たちからの購読料で何とか二年間続けました。



創刊当時のザ・パシフィック・ワールド

骨の髄まで知った資金の大切さ

水谷 部数はどれぐらいですか。

沼田 約四千部でした。四千部といっても、ほとんど寄贈です。大学や大きい図書館を中心に配るんです。それに、購読者といっても本当に読むために買うんじゃないくて、学生運動をヘルプしてやろうということですか

ら、なかなか続かなかった。その頃が一番体力もあり、全力を注いでやったわけですが、結局、資金にゆきつまりました。それで、同志の学生と一緒に日本へ帰ってまいりまして、当時の財界の大御所だった渋沢栄一さんにお会いして、事情を話したわけです。その時、渋沢さんは「趣旨には賛成だが、そういう雑誌の経営はむずかしいんだ」と言われましたが、ポケットマネーで五百円を寄付して下さいました。それから、京都の本願寺へもお願いしましたら、ここでも五百円寄付していただきました。ただし、「続けてやれというのではない。これは今までの努力に対して出すんだ」と言われたのをよく覚えています。その当時の五百円ですから、それは大したものでしたよ。

水谷 しかし、それはすごいですね。

沼田 その時に、東大の高橋順次郎先生を紹介していただきました。先生も『ヤング・イースト』という英文の仏教伝道雑誌を出しておられたんですけれども、やはり資金に困っておられましたね。じゃあ一緒にやろうということになりました。編集とか印刷は日本でやることにして、私たちは向こうで資金集めなんかをすることで話がまとまりました。内

容は同じなんだけど表紙を替えて、こちらではヤング・イースト、アメリカではパシフィック・ワールドということでやりましたが、これも結局は、刀折れ矢つきて、四年ほどで終わりました。その時ですよ、どんなに立派な目的であっても、資金の裏付けがないと成功しない、ということ骨の髄まで知らされたのは。三十四、五才までやってきて、や々と本当にわかったということですね。

#### 役人生活に入る

水谷 それで日本へ帰ってこられるわけですね。

沼田 私を理解し、応援をしていただいた日系社会の有力な方々から「同じ苦勞をするなら日本でしなさい」というようなサセッションをいただきました。まあ、その外にも動機があったんですけれども、アメリカでの生活を切り上げて帰ってまいりました。

水谷 一九三〇（昭和五）年ですね。

沼田 はい。正月でした。幸いにも、私の専攻が経済統計学でしたので、内閣資源局の統計官に採用されましたね。

水谷 日本の一番不景気な時でしょ。「大卒は出たけれど」という、東大を出ても就職

ができなかった時代ですね。

沼田 運よくというか、自分の修めた学問が多少でも役に立つと思われたのか、統計官という得難い職に就かしていただいて、役人の生活がはじまるわけです。それをずっと続けておれば、ある程度のところまでは行っていたと思いますけれども。まあ、肉体的な苦勞はあまりありませんが、精神的にかなり悩みましたね。

水谷 やはり、仏教伝道の志、捨てがたく……。

沼田 そうですね。一度は失敗した伝道の仕事だけれども、何とかしてもう一度やってみたい。せっかくお寺に生まれて、お鉢（お鉢米―仏飯のこと）によってお育てをこうむったんですから。ただし、人に頭を下げて寄付を頼んでやる仕事はやりたくない。と言っても、自分でお説教して歩けるほど勉強しているわけじゃない。何か自分で仕事をしなくちゃならんが、何がいいか。役人をしながら、そんなことを考えていました。

水谷 職を辞してでも、ということですか。

沼田 役人を続けていれば生活は保障されるし、家族も安泰ですよ。仕事をはじめて失

敗でもしたら、それみたことかと笑われる。

不景気のどん底で、何をしたらいいのかわからない。少なくとも、私のはじめたために他の人に迷惑がかかるようなことじやいかなと。とにかく、世の中の誰にも迷惑をかけず、社会のお役に立つような事業ですね。そのことを随分考え、調べもしましたが、気がつけばコロンブスの卵でして、不景気だと言いながら、日本は海外から随分たくさんのお品を輸入している。

水谷 当時は今とは違って、貿易収支が大変な赤字で困っていたんですからね。

沼田 ええ、全く逆の状況でした。だから、外国から輸入しているものを日本で作れば、国家のためにもなるし、一人でも失業者を救える。考えてみれば何でもないことですよ。



水谷 何でもないと仰るけれども、そのように考えつかれるということが、やっぱり大変なことですね。そこに先生の非凡さがあるんですね。

## マイクロメータの研究に投資するが――

沼田 いずれにしても、はじめから大きなもの、例えば自動車のようなものができるわけではないので、小さくスタートして、だんだん大きくなる仕事はないものかと。それと、私の郷里は広島県賀茂郡の志和という山村ですが、アメリカから帰ってきたときには、竹馬の友の家も、土地でいう「ひきあげばあさん」、乳母のような人ですけども、その人の家もなくなっていましたね。交通は不便だし、お米しかとれないような田舎ですから、だんだんさびれていくんですね。村から出て、広島や大阪へ移っていったらいいわけです。その時にチャットと頭をよぎったのが、スイスのことです。

水谷 時計に代表されるような精密機械工業ですね。

沼田 そういうことです。あの国は志和の村よりもっと山が深いのに、すばらしい産業をもっている。こういう山村でもできるような産業はないかと思ひまして、統計資料などを調べるのはお手のものですから、いろいろ調べてみました。最初に見つけたのは計算機です。手回しのあれです。ところが、よく調

べてみると、大阪に計算機を製造しているところがあった。もし、私が成功すれば、あちらがダメになる。これはいかにいうことでやめました。

水谷 最初は計算機だったんですか。その次にマイクロメータが……。

沼田 そうなんです。一ミリの百分の一、千分の一を測定するものですから、いろんなところで無くてはならない道具です。海軍でも年間二万円という補助金まで出して試作させたりしていましたが、いいものができないですね。だから、日本では作れないだろうということ、もう捨てられた産業になっていたわけです。これならいいと。私自身は機械のキの字も知りませんが、絶対無くてはならない品物だし、誰の怨みを買おうわけでもない。それどころか、国家社会のためになる。それに小さい商品だから、郷里の山村のようなどころでも工場をつくることができ。そう思い込むと、もうそれからは病み付きになっちゃいまして、誰かれなしに「そんな馬鹿なことばよせ」と言われたものですがね。それらの忠告は常識的にみれば当然のこととして、専門家がやってもできないものを素人にできようはずがないということですか

らね。

水谷 それをご自分でなさったんですか。

沼田 最初は違います。自分の金を出して専門家に研究してもらうことにしました。一種の投資ですね。蒲田に小さい研究所をつくって、二、三人で試作をしてもらったわけですが、二年たっても結局は何もできない。物の形はできるけれどもマイクローメータはできなかったですね。この時は本当に苦しかった。このまま役人としてやっていければ食うには困らないだろう。しかし、仕事をやらなかったら、悔いが残りはしないか。もちろん誰一人として新しい仕事に賛成する人などありませんよ。その時にね、私の気持ちを決めさせたのは、小さい時に読んだ『イソップ物語』なんです。農夫が人を雇って麦刈りをしようとするんだけど、なかなか刈れなくて、結局は自分で刈り取ることを決心する。その時になって、巢籠っていたヒバリの母子が飛び立っていった。という話ですが、誰がやってもできないようなことを、ひとに頼んでやらしてもらおうなんてのは、そのこと自体が心得違いだということに気づいたわけですよ。

### 役所を辞めて研究に没頭する

水谷 なるほどねえ。しかし、専門家が何人かかってできなかったことを、いわば素人の身でやってみようというのは、普通の人間には考え及ばないですよ。

沼田 それは随分悩みました。しかしね、飯に失敗をしても、家族を食わすことぐらひはしてみせるという自信はありましたから、腹を決めて役所に辞表を出しました。四か月ぐらひかかりましたよ、受理されるまで。その後は、例の研究所にやすもののベッドを持ち込んで、無我夢中でしたね。そういう心境になると、人様が仰るほどの苦勞じゃないんです。研究をはじめて四年目に、これならという物がやっと出来上がりましたが、その間は一銭の収入もありませんから、みんな借金です。借金が山のようになっております。

その後もいろいろと波乱がありましたけれども、お蔭さまでとんとん拍子でやってこれました。と言いましても、小さな産業のことですから、規模的にはさして大きくもなりません。大きな船でも飛行機でも、この小さいマイクローメータがないとできません。それほど必要なものではありませんが、これを作る

技術がむずかしい。その割には売上額が少ないんで、あまりやりたがらない商売なんです。

水谷 しかし、それから五十年でしょう。立派な企業にされました。

沼田 馬鹿のひとつ覚えで今日まで続けております。

水谷 普通では考えられないような大転進をなさって、いわば、ご自分の仕事に人生をかけられたわけですが、それも金儲けが目的ではなくて、仏教の伝道に必要な資金を自分の力で得たいというところから出ている。そして、それを実際に大きな規模で行なわれているということにつきましては、本当に頭が下がります。

### 仏教伝道への情熱あつく

沼田 いま仰っていただいたようなことで、マイクローメータづくりをやってきたわけですが、いかにして仏教伝道の事業を進めるかということにつきましても、いろいろ考えてまいりました。その一つの形が昭和四十年に設立した仏教伝道協会です。それまでも、会社として、お釈迦様の絵伝であるとか、玄奘三蔵の絵像のようなものを制作

して配布したり、まあ、いろいろなことをやってきましたけれども、今では、お蔭さまで仏教伝道協会の方でやらせていただいております。

**水谷** 『仏教聖典』のホテルへの配布活動は、協会設立以前にはじめられたわけですね。

**沼田** 英文のは昭和三十七年頃からです。

私自身は修行も何もしていない一俗人でございますから、自分がどうするということもできません。仏教聖典の配布も、ギデオン協会がやっているのを真似たものです。キリスト教は仏教より五百年も後に出来たのに、今では世界のすみずみまで入り込んでいます。五百年ほど前には、全世界の八・九割が仏教徒だったんじゃないんですか。とにかく世界最大の宗教だった。私は学者じゃございませんから、よくはわかりませんが。コロンブスがアメリカ大陸を発見したのが一四九二年でしょ。一五世紀までは、キリスト教はヨーロッパの片隅にあっただけなんです。それがどんどん世界に広がっていった。

**水谷** そのとおりですね。

**沼田** 北米・南米はもちろんのこと、オーストラリアにもニュージーランドにも、ある

いは、アフリカ辺りにもキリスト教が来る以前に、仏教はインドからチベットに伝わり、それが中国・朝鮮から日本まで来ています。ところが、キリスト教の方は、仏教が広まったのとは違ったやり方で、他民族・他宗教を圧迫しながら、強引ともいえる手段でもって広がっていきますよね。アメリカ・インディアンにしても、メキシコ・マヤ民族にしても、いわば、キリスト教に圧迫されたり、滅ぼされたりしたわけでしょう。

**水谷** 世界史の上には、そうした事例がたくさん見受けられますね。

**沼田** 仏教の方は、中国から日本へ伝わる過程で、他民族を圧迫したり、滅ぼしたりしていませんね。中国に伝わったときは、すでに孔子・孟子の教えがございましたが、それと争うのではなくて、それと手をつないで、中国の文化を育てている。日本でも神道と血を流すような争いをしたわけではなく、やはり、手をつないで日本の文化を育てました。ですから、仏教を世界に広めていくということとは、とりもなおさず、世界の平和を願うことなんです。キリスト教同志でもマホメット教同志でも、今も戦争してるんですから。世界に平和をもたらし下さるのはお釈迦さん

だけだと、本当にそう思っています。全く馬鹿のひとつ覚えで、学問的には何もわかりませんし、子供の時に教えていただいたままに、仏教を信じているに過ぎないんです。

**期待される仏教伝道協会の今後**

**水谷** 先生は仏教について深い造詣をお持ちだと思います。それも頭だけでやった上っ面の学問じゃなしに、仏教者として身について本当の学問ですよ。しかも、特別の修行をしておられないと仰いましたが、毎日毎日の事業を進めていらっしゃる中で、まさに修行をなさっている。先生のお話を承っていてそう思いました。

**沼田** 恐縮でございます。

**水谷** 仏教伝道協会というこれだけ素晴らしい事業を、個人のためじゃなしに、世のため人のために進めておられるということに、ありがたいことだと、手を合わせて拝みたい気持ちでいっぱいでございます。そして、これから必ず花を咲かせ、立派な実を結ぶんじゃないかと思えます。

**沼田** いやいや、そんなに言われますと困りますが、自分じゃ一生懸命やっていますからね。人様からは馬鹿なやつだと思われるか



もしれんけど、ただ一生懸命やるだけです。

水谷 これからの日本の仏教というものを考えますと、この仏教伝道協会を中心にして、真実の仏教が出ていくんじゃないか。ちょっとお聞きしたところでは、『大蔵経』の英訳のほかに、「南伝仏教」の研究をなさざる予定があたりだそうですが、ただ単に教化伝道だけじゃなしに、仏教の歴史のまだわかっていない面を掘り起こしておかないといかんという、学者が気のつかないようなことをやっていただけるのは、本当にありがたいことです。

沼田 今日まで命を永らえさせていただいて、自分のやりたいと思っていたことを、ある程度やらせていただけることに感謝しております。

水谷 やっぱり御仏のお導きでしようね。

沼田 正信偈の中の「煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我」という、あのお言葉を私はいつも思うんです。これまでやってきたことは、自分がやったんじゃない、やるように仕向けられたというか、やらせてもらってるんだと。まだ、小さい頃にですね、寺の庭でよくアリの砂糖菓子をやって遊びましたが、アリが通るところに菓子を置いてやると、そ

れを見つけて巣へくわえていく。そのアリは俺が見つけたと思うかもしれないが、それは私が置いたことを知らないだけのことなんです。私が今やっていることだって、西方淨土から御仏のお導きによってやらせていただいているんじゃないかと思うんです。特に、最近それを強く感じています。

### 仏教教育は可能か

水谷 仰るとおりで、全く同感なんです。が、いま仰った「大悲無倦常照我」というようなことがですね、先生の歩んでこられた道程の中ではじめて味わえるんですね。話は少し変わりますが、これからの教育の問題ですが、最終的に「大悲無倦にして常に我を照らす」ということを味わえるような素地を、どのようにして育てていくのか。現在の学校教育にしても、家庭教育にしても、言わず語らずのうちにそういう素地を育てられるような条件がありませんね。特に、核家族化が進んでお年寄りのいなくなった家庭では、そういう宗教情操の教育はできなくなっていますわね。

沼田 私は思うんですが、あの敗戦でね、日本が受けた一番大きな被害は伝統的な家族

制度の破壊なんです。そのために、お年寄りの経験に根ざした貴い教えが子供たちに伝わっていないわけでしょう。そうかといって、新しくですね、そういうことが可能なものをつくらなきゃならないことにも気づいていない。これは大変なことだと思いますよ。

水谷 家庭でできないから学校でやるのかというところ、ご承知のように、教育基本法で特定の宗教教育をしてはいけないと定めています。公立の学校では一切できないわけですね。その点はどうお考えになっていますか。

沼田 やはり、学校でやるよりは、家庭だと思えますね。私自身だって、学校で覚えたわけじゃなくて、みんな家庭ですよ。

水谷 学校教育じゃなしに、家庭教育ですね、教育の基本はね。家族制度が崩壊していくことで、日本の教育はゆがみはじめた……。

沼田 私はそう思っております。

水谷 そういう意味ですね、いま臨教審でいろんなことを言うておりますけど、一番大事なものは家庭での教育なんだから、むしろ、今の若いパパやママにどうやって宗教情操を植えていくのか、そういうことが非常に大切になってきますね。仏教伝道協会が

グローバルな視野で仏教精神の普及に努めていらつしやることは、これも大事なことなんです。が、いかがでしょうか、日本の教育を考へる場合に一番中核になる家庭にですね、大いに目を向けていただければ大変ありがたいと思います。

沼田 ありがとうございます。

水谷 ちょっと言い過ぎたかもしれません。が。

卒業記念に仏壇を贈つては

沼田 いやいや。実は私もそういうことは大切だと思つておりましてね、一度、伝道協会の方でタンスの中に仏壇を組み込んだものを作つて、ピーアールしかけたことがありました。が、今はやめています。若い人たちの多くは、仏壇は死んだときに位牌を収めるところだと思つています。お年寄りと一緒に住まないで、ますます仏壇を調えるということもなくなつて、むしろ、それが習慣になつてしまつてゐる。そういうことです。から、結婚のお祝いにお仏壇をプレゼントしたらどうかと。死んだ人をまつるための道具だというよな考え方ではなしに、祖先に手を合わせて感謝するという習慣を広めるために、若い人

たちの家庭にも仏壇をということ、やつてみようかなと思つてゐるんです。

水谷 なるほど、いいですね。いっぺんは無理でもね。いきなり阿弥陀さんを拝めといつてもピンとこないから、祖先を崇拝するということですね。

沼田 大家族だとか、おやじやおふくろと一緒に住むというようなことは、もうこうなつてきたら、なかなかできないことでしょうから、それぞれの家庭に仏壇を調べてね。

水谷 私どもの大学でも毎年、千人余りの学生が卒業いたしますが、こちらの『仏教聖典』を使わせていただいております。今のお話を聞いて思つたのですが、仏教聖典だけじゃなしに、こちらで仏壇をつくつていただいて、卒業記念に学生諸君に贈るというのもいいんじゃないですか。そういう運動をやつていくことによって、仏教精神の涵養という面でかなり具体的なものが出てくるかもしれないね。

沼田 学生さんがびっくりするでしょう。

水谷 まあ、いっぺんにやると、抵抗を感じるかもしれませんが、それが抵抗なく受け入れられるようになって、卒業記念に仏壇を贈ることが常識になれば、これはすばらしい

ことだと思ひますがね。まあ、そのための下地をつくつていかなければなりません。が、その下地は仏教伝道協会のお蔭で少しずつできていくんじゃないかと思ひます。

沼田 どこまでやれるかわかりませんが、少しでもお役に立つことがあれば、一生懸命やらせていただきたいと思います。

水谷 今日は、長時間にわたつて、先生の本當の仏教者としての生き方、そして、それを支えているすばらしい信仰心などについて、貴重なお話を伺へましたことに心から感謝いたしますとともに、ますますお元気で仏教伝道のためにご活躍いただきますようお願いを申し上げます。ありがとうございます。

(文責 編集部)

場所 東京・仏教伝道協会  
期日 昭和六十一年六月十六日  
同席者 総務課長 堀 隆 廣

